



河合文化教育研究所  
主任研究員

丹羽健夫

# 教育を 読む

吉田茂といえば、日本が第二次世界大戦に敗れた翌年の1946（昭和21）年5月から、8年間にわたって日本の総理を務めた人物である。いわばこの国のどん底の時期を支え、経済、民生を復興させ今われわれが享受している、平和にして豊かな国の土台を築きあげた人物である。吉田は明治39年東京帝国大法科卒業後、外交官試験に合格し翌年から終戦まで中国、イタリア、英国などの領事、公使、大使を歴任した。その吉田の三女が、ともに歩いた父の横顔を綴った一冊である。

父吉田のイギリス大使時代、18歳の著者はジョージ六世の招待でバッキンガム宮殿のパーティに招かれ、盛装をしてフロアで踊っているときに、国王陛下ジョージ六世の刀の鞘がドレスの裾に引っ掛かり、レースの生地が裂けてしまった、などとい



『父 吉田茂』

麻生和子著  
新潮文庫  
定価 550 円+税

う際どくも華やかなエピソードが綴られる。

著者の母、つまり吉田の妻雪子は久保利通の孫にあたる。利通の次男の牧野伸顕のぶあきは外交官や大臣を務めた重臣であり、著者の祖父に当たるのだが、たまたま熱海に祖父を訪ねていたときに2.26事件が起こる。陸軍将校の反乱である。重臣の祖父も襲われ、銃弾を浴びながらみんなて裏山へ逃げる。逃げ込んだ山奥の小さな家で、祖父と孫は角砂糖に目をつけてダイスをして遊ぶ。スリリングな描写だがえらい人たちは大変だなとも思う。

吉田の足跡で何と言っても大きなものは、1951（昭和26）年の太平洋戦争を締めくくるサンフランシスコ平和条約と日米安全保障条約の締結であろう。著者も同行する。そして調印に使った万年筆をねだって手に入れる。この条約はソ連・中国も巻き込んだ全面講和か、対米中心の単独講和かで国内世論が激しく対立していたので、帰国後の抵抗を覚悟していたのだが、羽田空港で出迎えの日の丸の小旗があふれていることに、父とともに感激する。

吉田総理といえば「バカヤロ一解散」が、有名である。社会党右派の

西村栄一氏との質疑応答のなかで、総理がバカヤロ一と大声で罵ったというのが解散の原因である。しかし本書によれば、ほとんど口のなかでつぶやいたのが、すぐ傍にマイクがあって入ってしまった、というのが真相のようである。壁に耳あり・・・。

選挙演説を、ある小学校の会場で行ったとき「これからキミたちもよく勉強して・・・」などと場違いの話をはじめたというエピソードも笑わせる。同じく選挙演説を、寒い冬の日には外套（オーバーコート）を着て街頭でやっていたところ、聴衆から外套をとれといわれ「街頭演説だから外套を着ているのだ」と答えたなどの駄じゃれも出てくる。

若い頃吉田は麻布の自宅から霞が関の外務省まで、馬に乗って通勤したそうである。なんとも優雅ではないか。

著者の母、吉田の妻は乳癌で亡くなる間に、急に着物を買いだす。なぜかと著者が聞くと「日本では形見分けをするけれど、そのときにあんまり分けるものがなかったら、お前が恥をかくだろうから」と言ったという。

父吉田茂を語りながら、古きよき日本がいっぱい出て来る好著である。